04-15

看護学生が自己評価の指標を決定する因子 －統合実習後のインタビューの検討－

富山赤十字病院　富山赤十字看護専門学校[1)]、
福井大学医学部看護学科[2)]
○南野（みなみの）　まゆみ[1)]、上野　栄一[2)]

研究目的は、実習の成果に対して学生が行う自己評価の過程において、どのような因子が評価指標を決定しているかを明らかにすることである。研究対象者は、専門学校３年過程の学生で、平成25年度に統合実習を終え同意を得られた３年生21名である。半構成的面接を用い、３～６名のグループに分かれ、所要時間35～45分のグループインタビューを行った。得られた76のデータは内容分析し、29のコードから10のサブカテゴリーと５つのカテゴリーを生成した。結果、自己評価の指標を決定する因子を以下の５点見出した。

1. 患者や家族からの笑顔、感謝、拒否という直接的な反応
2. 患者の状態の推移
3. 教師や看護師との評価の一致度、助言やその理解度
4. 看護のプロセスの振り返りを通して実感する自らの行動
5. 感覚的な自己判断

04-16

技術練習ノートを活用して見えたこと

諏訪赤十字看護専門学校　教務部
○石橋（いしばし）　絵美（えみ）

【はじめに】本校では、看護技術習得のために技術試験を行っている。授業で、技術の知識・方法を学び、各自練習を重ね試験に臨む。学生は、練習回数を重ねるだけでは技術習得に繋がりづらい。学生の技術習得には、自分の状況を客観的に評価し、技術練習を効果的に行えることが重要である。そこで、練習ノート（以下ノートとする）を使用し、練習目標・うまくいった所・うまくいかなかった所を書き、次の練習目標を考えるようにしていった。そして、ノートに記入後教師がコメントしていった。技術習得においてノートの使用を通して、学生にどのような効果があったのか明らかにする。

【方法】対象：３年過程看護学生１年生　35名。方法：１年次１年間の技術試験が終了した２月に学生に対して質問紙を配布。内容は、「ノートを使用して感じたこと」である。自由記載とし、分析は記入内容を意味の類似性により分類した。倫理的配慮：対象に研究の趣旨を説明し、協力の有無は成績に影響しないことを説明した。アンケートの回収を持って研究に同意が得られたこととした。

【結果】質問紙の回収は、回収数15回収率42％であった。分類の結果、「目標の明確化」「意識した練習」「基本に戻って振り返る」「客観的に振り返る」「教師のコメントが練習に影響」「負担」の６項目に分類できた。

【考察】ノートの使用により学生は、練習回数を重ねるだけではなく、「自己を客観的に評価」し、「練習に活かす」ことを繰り返していた。どうすればよりよい技術になるのか自ら考える力につながっていた。しかし、経験が少ない学生に、すべて自力で考え練習するには困難な時がある。教師がコメントすることで、新たに考えるきっかけになったり、認められることでやる気につながっている。ノート使用には、負担を感じることもあるが、技術習得には効果的であることが多い。

04-17

ともそだち教室での看護学生の学び

諏訪赤十字看護専門学校　教務部
○田村（たむら）　奈々（なな）

【背景】本校では、小学生キャリア教育**ともそだち教室**で小学生との交流学習を実施。看護学生（以下　学生）が主体となり看護学の講義、小児看護学演習（調乳 おむつ交換 哺乳 骨折の応急手当 止血法）を通しともに学ぶ。学生は、小児看護技術の知識・方法を使用し、計画立案、教師より指導を受けた後、練習し、本番に臨んだ。**ともそだち教室**での学生の達成度と学びを明らかにしたので報告する。

【方法】対象：３年課程看護学校２年生　35名倫理的配慮：対象に研究の趣旨を説明し、協力の有無は成績、その他に影響しないことを伝え、質問紙の回収をもって研究への同意が得られたとした。方法：演習終了時質問紙を配布し、後日回収。記入内容を熟読し、学生の達成度（100％達成中）を平均値（中央値）で、学生の学びは回答内容を類似性により分類。

【結果】回収率100％・各々の学生が立案した目標に対しての達成度平均値95.2％（参考　中央値90％）理由として、小学生の良い反応（楽しかったという言動、笑顔等）・学生の学び学童期の特徴を理解し、楽しく興味を持って学べる指導計画・工夫や準備の大切さ(○×問題で要点の整理、専門用語を避けたわかりやすい説明や発問)いまここでの小学生の反応や経験に合わせて関わりを変化させることの大切さ小学生の緊張感を察知して緊張緩和、体験有無を尊重した関わり（できないことを支援、できたことを褒めて肯定感情）、できている対象には根拠も伝えて自信をつける。

【結論】　学生は、学童期の特徴の理解や技術の実践だけでなく、相手の反応を大切に、関わりを変化させ工夫させてゆくことの大切さ（相互作用の中での援助的人間関係）を学び、同時に難しさや面白さを感じていた。達成度が高かった理由として小学生のポジティブフィードバックが喜びをもたらした為と考える。

04-18

現行の海外研修に対する看護学生・専任教師の意識

和歌山赤十字看護専門学校
○松尾（まつお）　文美（あやみ）、畑下　眞守美

【動機･目的】A看護専門学校では2001年度から学生の海外研修（以下、研修）を開始し、毎年２～４人の学生が欧米諸国で２週間研修を行っていた。しかし、応募が年々減少し、2013年度は応募者１人のため研修を一時中止した。そこで、今後の研修を検討するため現行の研修に対する学生と専任教師の意識を明らかにした。

【調査方法】アンケートは学生151人と教師11人に2013年６月に実施した。調査内容は、研修参加希望、応募希望、応募したい理由、応募したくない理由、研修に行きたくない理由等である。倫理的配慮は、参加の自由意思、個人が特定されない配慮、結果公表等を書面と口頭で説明し同意を得た。

【結果】研修に「行きたい」学生は65.7％（88人）あったが、その内「応募したい」は44.3％と低かった。学年別の「応募したい」は１年生87.5％と高く、２年生30.4％、３年生26.8％と低かった。研修に「行きたい」かつ「応募したい」学生の理由（複数回答）は、「海外の人々とのふれあい、多様な文化等の体験」84.6％、「外国に行ってみたい」71.8％、「国際交流をしたい」64.1％が多かった。「行きたい」が「応募したくない」理由は、「応募時のレポート」62.5％、「応募時の面接」52.1％、「研修後の報告会」41.7％であった。「研修に行きたくない」学生46人の理由（複数回答）は、「国外に出るのが怖い」56.5％、「お金がかかる」54.3％、「全く興味がない」28.3％であった。専任教師の「学生の応募したい理由」「応募したくない理由」については、学生の結果とほぼ同じであった。教師は現行の海外研修に対する学生の意識をほぼ推測できていた。

【結論】学生の６割は海外の人々との交流等海外研修に興味・関心はあるが、応募者選抜のレポートや面接が応募を躊躇させていることが考えられ、学生の動機を活かした新しい企画の必要性が示唆された。